

磯焼けが深刻化する小田原の海で、新たに増えている海藻について

非常勤職員 春山 出穂



近年、気候変動に伴う海洋環境の変化などの影響で、沿岸の海藻が失われ、砂漠のような状態になる「磯焼け」が全国的に広がっています。

私の所属する神奈川県水産技術センター相模湾試験場（以降、当场）から最も近い海である小

田原漁港新港西側蓄養水面（以降、小田原漁港）でも磯焼けが進行し、2023年春までは天然のカジメやアカモク、ノコギリモクなどが混成する藻場が形成されていましたが、今はこれらの海藻はすっかり姿を消しました。



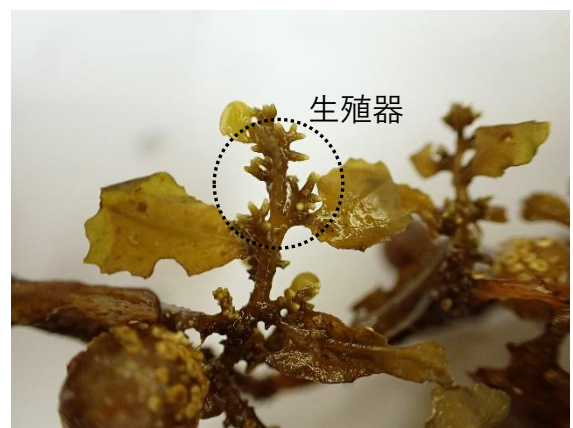
小田原漁港から消えた海藻たち（左：ノコギリモク 右：カジメ）。

しかし、去るものあれば来るものあり。2023年頃から、それまでノコギリモクが生育していた

水深 3~5mの浅い海底のブロック上に、相模湾では自生が確認されていなかった南方系のホンダワラ類「フクレミモク」が徐々に見られるようになってきました。今年はその分布範囲が去年の約2倍、約 350 m<sup>2</sup>にまで拡大し、「ガラモ場」と呼べるほどに増加しています。



2026年5月に水中ドローンで確認した小田原漁港新港西側蓄養水面の海底の様子。丈が短く芝生のように一面に広がっているのがフクレミモク。



フクレミモクの全体（左）と、葉と生殖器のクローズアップ（右）

フクレミモクは多年生の海藻で、1月頃に葉が目視できる大きさ（3~4 cm）になり、7月に最大（60~1m）に達します。その後、7月中旬から8月上旬にかけて成熟し、茎から千切れて流失し

ます。



1月に葉（黄色丸の内側）が出現 ※水中ドローンで撮影



8月中旬・成熟後に茎から流失して、付着器のみが残る

流失後は、5円玉ほどの付着器だけが海底に残り、秋から冬までを目立たない姿で過ごします。

この生活史は、植食性魚類による食害の時期とうまくずれているようです。6月の食害が増える

時期には、嗜好性の高い他のホンダワラ類がまだ残っているため、フクレミモクは食べられにくいと考えられます。また、食害が一時的に減少する 7~8 月中旬の植食性魚類の産卵期に、フクレミモクは成熟・流失しており、8 月中旬以降の食害が最盛期を迎える頃には、すでに目立たない付着器の状態になっているため、食害を回避できているようです。

このように、植食性魚類からの食害に対して有利な生活史を持つことに加え、硬くてあまり好まれない性質もあるのか、フクレミモクは小田原漁港で勢力を拡大しています。そこで当场では、増殖に取り組んでいる早熟カジメとフクレミモクを混植し、カモフラージュ効果によってカジメの食害を抑えられるかどうか、試験を始めています。



ほうじょう甲板でカジメの種糸をワイヤーマッシュに固定し、フクレミモク群生へ設置

これからも当场では、新たな手法も取り入れながら、効率的な藻場再生を目指します。

以上。